

選定などを行うオペレーションコントロールセンター（以下、OCC）の担当者は、すぐに調整を開始。運航する航空機の検出が最初の課題です。予備機が羽田空港に1機あることが判明しましたが、JICAのリクエストは、成田市の倉庫に保管している医療資機材を短時間で運ぶため、成田空港の出発です。この航空機を羽田から成田まで移動させるために、両空港の発着枠を取得しなければなりません。

しかし、容易には進みません。羽田空港の出発枠の取得が難しいと報告があったのです。担当者は天を仰ぎました。しかし、その胸に「東日本大震災で世界から受けた支援に、少しでも恩返しをしたい」との熱い思いが浮かびました。ここで諦めることなく、「人道的支援」「災害救援」を前面に打ち出し、粘り強く交渉。その結果、なんとか発着枠の取得が叶ったのです。OCCに歓声が起きました。

さらに、乗務員の確保や搭乗者・医療資機材のリストの確認などスタッフの夜を徹しての作業は続きました。

いよいよ出発

翌11日13時00分。国際緊急援助隊のメンバーが成田空港に集まり、結団式が執り行われました。搭乗するのは医療チーム24名、JALの添乗3名です。「日本を代表して、フィリピンの方々の力になりたい」と強い意気込みが感じられました。

11日15時。すべての準備が整い、当初の予定どおりチャーター便は出発。スタッフの夜どおしの作業が突り、JALの「22時間30分」の闘いは区切りを迎えたのでした。

「離陸後の機内の様子はいつもと違いました。国際緊急援助隊のメンバーは急ぎで召集されたため、深夜勤務の後に駆け付けた隊員もいます。大勢の隊員が、航空機の後方中央部の横3席の座席を使って仮眠を取っていました。隊員たちの闘いは、これから始まるのです。

隊員の休養を最優先にするため、客室乗務員は物音を立てないように配慮していました。日本を代表してフィリピンに赴く隊員に、感謝の気持ちや伝えたい。乗務員たちはカードに思いをつづり、機内食をご提供する際にお渡しするこ



2013年11月8日から9日にかけて、猛烈な強さの台風30号がフィリピン中部に上陸し、レイテ島のタクロバンを中心に甚大な被害をもたらしました。フィリピン政府からの支援要請を受けた日本政府は、国際協力機構（以下、JICA）の国際緊急援助隊の派遣を決定しました。一刻も早く、現地へ――。

22時間30分の闘い

11月10日16時30分。JICAからJALの営業担当者へ1本の電話が入りました。「11日にフィリピンへのチャーター便を手配できないか?」――。担当者は思わず息をのみました。通常のチャーター便は、準備に最短でも1カ月ほど要します。今回の出発予定は11日15時。22時間30分しかありません。この日は、羽田空港の強風が原因で、上空待機などにより運航が乱れており、チャーター便の緊急手配にはかなりの困難が予想されました。一方で、フィリピンの惨状も刻一刻と明らかになってきています。「日本の翼として、何としても飛ばす」。JALの闘いが始まりました。

発着枠確保のせめぎ合い

使用する航空機の調整や、飛行コースの

CSR Pickup

～航空会社ならではの災害時の対応～

国際緊急援助の一翼を担って

笑顔と心のこもったサービスに感謝

2013年11月8日にフィリピン・ビサヤ地方を襲撃した台風ハイヤン（フィリピン名、ヨランダ）の発生を受け、日本政府は国際緊急援助隊の派遣を決定。医療チーム1次隊に選抜された24名の隊員は、日本各地から成田空港に集結し、11月11日、JALに準備していただいたチャーター機で、先乗りした1名の隊員が待つフィリピンの首都マニラに出発しました。

今回の台風は、最大瞬間風速105メートルに及ぶ突風と高潮を伴い、広範囲にわたり壊滅的な被害をもたらし、非常に難しいミッションになることが想定されました。各隊員とも、東日本大震災の際にフィリピンよりいただいた支援への恩返しという思いもあり、一刻も早く現地に入って支援の手を差し伸べたいという高ぶる気持ちと緊張感に包まれながら搭乗口に向かいました。

出発の前日に派遣が決定され、極めて限られた時間



なかで出発準備をした我々にとって、機内で過ごす時間は現地に入った後の活動をスムーズに始めるためにも貴重でした。約4時間のフライトにおいて、現地情報確認、活動計画や役割分担の検討、医師・看護師隊員による健康チェックなどを行いました。また、徹夜で準備した隊員も少なくなく、休憩をとることも効果的な支援を行うためには重要でした。

そうした私たちの最初の活動を支えていただいたのは、JAL8741便のクルーの皆さん。特に、客室乗務員の皆さんの笑顔は私たちの緊張を和らげてくれました。緊急セブを経由して12日にタクロバンに到着。被災直後の現地は、東日本大震災を思い出させる光景で、水・食料・移動手段・燃料・通信など、あらゆるものがない極めて厳しい状況でした。

今回、医療チームは1次隊から3次隊まで派遣され、タクロバンと遠隔地域に

おいて活動し、約3300人に対して診療を行いました。死者・行方不明者数約7300人、被災者数約1608万人にも及ぶ今回の甚大な被害規模からすれば救援活動のごく一部を担ったに過ぎませんが、被災者に寄り添った日本らしい活動を行うことができたと思っています。

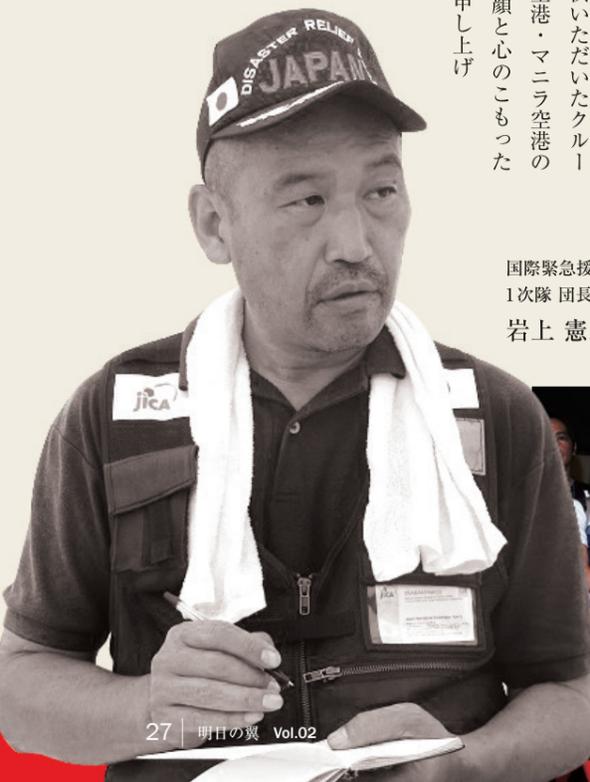
現地での活動を終え、11月24日、マニラ空港からJAL746便に搭乗する際、待合室に「Don't Give Up, Philippines」のメッセージが掲げられているのを目にしました。

フィリピン中部の被災地は、緊急ステータスから復旧、そしてこれから復興に向けて一歩一歩進んでいくことになります。少しでも早く、そして着実に、現地が復興することを願いつつ、JICAとしても引き続き支援をしていきたいと考えています。

私たち国際緊急援助隊医療チームに、安全で快適な移動をご提供いただいたクルーの皆さま、そして成田空港・マニラ空港のスタッフの皆さま、笑顔と心のこもったサービスに心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました！

国際緊急援助隊医療チーム
1次隊 団長
岩上 憲三さま



とにしました。静かな機内に、ベンを走らせる音だけが響いていました。

人間として何が正しいかで判断する

約5時間後、チャーター便は無事マニラに到着。しかし、緊急援助隊にはゆっくりしている時間はありません。少しでも時間を短縮するため、JALスタッフが総出で荷物の搬出作業を行いました。あるJALのフィリピン人スタッフは言います。「国難のときに、自分も少しでも役立ちたい」。自らトラックの荷台に乗り込み、時間を忘れて手伝いました。

そして、マニラ到着からほどなく、緊急援助隊一行はレイテ島に向けて飛び立ち、支援を待ちわびる多くの被災者に手を差し伸べたのです。

災害からの復旧・復興に長い期間取り組むことになる人々にとつて、忘れ去られてしまうことはとても苦しいこと。マニラ空港では、いつも共にいるということを伝えるため、「がんばろうフィリピン」のメッセージを日本語とタガログ語・英語で、チェックインカウンターや搭乗待合室などに掲げました。

マニラ支店のスタッフの心に浮かぶのは「Doing What is Right as a Human Being（人間として何が正しいかで判断す

る）」という言葉。JALフィロソフィにあるこの言葉がスタッフのストラップの鶴丸ロゴの裏面に印字されています。今回の災害で、この言葉を強く意識することになりました。



日本の翼として、社会のために

大きな災害にあたり、日本と世界、そして国内各地域を結ぶ航空会社がなすべきことは何か。

今回のフィリピン中部における台風被害においても、NGOネットワークのジャパン・プラットフォームと連携し、救援活動に赴くNGOスタッフの渡航協力を無償で行いました。加えてJALマイレージバンク会員の皆さまへ寄付を呼びかけ、1734名様から714万円のマイル相当額を被災地支援に役立てたほか、JALとして支援金1000万円やグループ内の従業員から集めた約100万円の募金を届けました。

安全運航の堅持に加え、こうした災害時の対応やすべてのお客さまに安心して飛行

機をご利用いただくことなど、私たちにとって「安全・安心」は重要な社会的責務だと考えています。

JALグループはこれからも、日本の翼として、本業である航空輸送事業を通じて、社会からの期待に応えていくべく、全力を尽くしてまいります。

